





李度 醉輕浮世事 老重故鄉人

狂言天志人三徳と思ふ也

善法應有り 要者善なり
よ所中を子しんむしし 北南けんき
みちをやくくさくさり

心合しん言ぬ人乃あれハニ

それ 乃知くをふるら 定むん

友をよ友らさるれわあり

えしめり 善者善なり 悪者悪始終乃

天地者生之本也 先祖者類之本也 君師者

治之本也

人乃り乃やましといハまれん

く心しくせ人乃うハさるべき

是を修しひ

息心 陽善

この一 鑑着

こと四月廿



禮樂の道ハ衆庶の心ヲ

導ク世ヲ治スル事トシテ

可なりトす處ニヤハ

思ハレハ六位を以て人

此書ハ六ノ位ニ在ル

大臣諸侯大夫親ト堂トハ

威儀ハ禮儀ハ一ハ聖經

賢典是を本據トシテ

日用人事其法ハ依順シ

たリ事ナレハ官ト洋ト

大ニ美德あり萬物を

宰

制して羣衆を役使せしむ
而常人乃境界にして是を
きくし約ありしあり秦
乃沛代より大行禮官あり
神儀をつらさく漢乃景帝
是を大鴻臚と改めし
鴻臚ハ九賓の儀を掌る
職なりと子全體禮あり
説き約ありし天地は
萬物を宰制し羣品を
役使し四時又順して動
ちとて成功を遂げし

之を自然なりし
人カ所營為し約あり
あり故に美善盛大
衆多乃徳あり孔子曰父
四時行これ萬物成し子
而たり太史公乃言り三
代乃損益を觀り人情
ありて禮を制し人乃
性質より依り儀を化し
ありしこと申來り
不ひきし

人道乃經緯 萬端乃規矩
つらぬを以て所なし 誘
進を以て仁義を以て束
縛を以て刑罰を以て故
徳厚きものハ位尊く禄
重なりものハ寵榮ハ海内
を總一として萬民を整
齊するなり 人體ハ駕乘
に安す されうたもの金輿
錯衡以て之れ飾を繁し
目は五色を以て之れ
黼黻文章を以て能を表し

耳ハ鐘磬をたらしむ故
ハ音を調諧し其心を蕩
口ハ五味を甘くされうた
庶羞酸鹹を以て美を致し
情ハ珍善を好む是を爲す
圭璧を琢磨し以て其意
を通し大路越席皮弁
布裳朱絃洞越太羹玄酒
を以て君臣朝廷尊卑
貴賤を序下り黎庶を
車輿衣服宮室飲食嫁娶
喪祭を分ちて乃事各々

宜適あり物に於節父あり
なり孔子乃禘八寸より
灌してより乃ち八寸れを
御を欲せんと乃ち未ひ
魯乃ちまのり乃ち昭穆を
亂し物をなげきし故
なり周礼とるく禮樂廢
壞して大小兩を踰えし
ゆくや管仲、家小ハ三歸
を兼福えなくして乃ち驕奢
をいふ法も順し正を
之の世はあやとりれ奢溢
儲差乃輩おれを顕榮

なりとふ子夏ハ聖門乃
高弟なれとも出て紛華
盛麗を見て是を悦び
入てハ夫子乃道を聞て
たろしむ二の乃ちの心上
に戰ていまこ自決し
物。ことあはる而る
況や中庸以下善教を
失し被服俗を成し物
より
孔子曰くかたき名を正
志くせん衛國として居る

合ハテ 論語ニ 子路アリ
衛國ノ君、子を待て政を
なさしめハナトを、先
したるそとたるの如し時
必以名を正しくせん
と云ふなり 馬融是を
注して百事乃名を正し
んべしと云ふ

仲尼乃没後その業を
文の輩之な沈湮しして
あはれゆるは或ハ齊楚
の如き或ハ河海ノ入心
豈

痛まき久しや 秦天下を
有ハルはつり 悉く六國
乃禮儀を内れて其善
を采り 擇ぬ聖制
合ハテといふも其君を
尊ハル臣を抑へ 朝廷
濟と云ふ古より以來其
禮儀ハ依ハ漢高祖
至テ光り四海を有ハ
叔孫通頗ハ増益減
損ハるをわれハ大抵

之乃奉此故曰龍卷海天
子乃稱號より下佐
僚及ひ宮室官名
よりて變改し約而
少し孝文即位有司議
志て儀禮を定めんとする
時より孝文道家の學を
好まざるを厭慮し
繁禮飾貌ハ端々於て益
なし躬化せし何より於て之
なるとありこれ帝在位
乃爾天下に質素を恒
りてありし約を此幸し

たより慎夫人衣裳を
地に曳き約し帷帳を
文繡をとり約し尋常
乃御膳ハ瓦器を御用とし
よくと此節儉を化し
約せり古法乃今又合
をやめ去り孝景乃御時
御史大夫鼂錯ハ世務と刑名
とより明くより太く帝を
干し諫めて曰諸侯乃藩輔
臣子一例なるハ古今乃制也
今大國治を專めし政事を
異よし京師より稟けり

思くハ後ハ傳ハるる以テ孝景
そ此謀^計之を周ハ後ハ六國
畔と逆ハ是と云々錯々首名
なるを以テ天子錯と誅し
難を解と云ふなり是ガ
後官者交を養ヒ福を
安し仰るる敢てまて議
多しあなし今上即位儒
術乃ちを招き致して共
議を定めたりとなれども
十餘年 ますて一定物
或ハ古ハ太平として萬民
和喜し瑞應あましく至

乃ち風俗を采て制作を定む
帝これを用て御史の制詔
して曰く蓋受命而王各
有所由興之を殊ふして
歸を同じと云ふなり民
因て作り俗を追て制を
為さるる議者みな太古
をいふも百姓何を望ん
漢とまて一家乃事なり
典法傳へずハ子孫何を
いん化乃ちさるるなるハ
博治乃ち成きとのハ福狭其
ひらきとせらるる勉めざる

すなはち太初元を以て

正朔を改め 元しを夏元正を
用ひて正月を歲首

と改年して
太初とすなり 服色をあらため易

越山を封し宗廟百官の儀

を定む以て典常とし是を

後世に垂れしまふ云

礼ハ人より由て起ゆ人生欲

有り欲して得ざることをハ

忿り争ふことあり忿ん

度量なることあり争ぬ争ぬ

亂ゆ先王より亂を要む

故より礼義を制して以て

人より欲を養ふ人より求と

給ふ物より窮せぬ物欲

屈せきらしむ二者相待ん

長し抑是れ禮の起る

所なり故より禮ハ養ふなり

稻粱五味ハ口をやしむ

栝蘭芬苴ハ鼻をやしむ

鐘鼓管絃ハ耳を養ふ如

刻鏤文章ハ目を養ふ如

跽房牀第几席ハ體を養

ゆ人なり故より禮ハ養

君子すくなくして其養を
又これ辨をさしむ辨を
好むゆえにハ貴賤由等
あり長少差あり富
輕重を稱あり改り
天子乃大路越席ハ體を
やしり側載臭莖ハ鼻を
やしり
前ハ錯衡あるハ目を養ふ和
鸞ハ聲歩ハ武象なり中ハ
驟ハ韶護ハ中ハ目をやしり

ゆえなり龍旂九旒ハ信を
やしり寢兕持虎鮫鞮彌龍ハ
威を養ふなり故ハ大路乃馬
必以信を以て教順ハ至ハ然
して後ちこれハ乗ハ安を養ふ
ゆえなり孰く知之夫ハ士
ハ死ハ朽リ節を要するハ
生をやしりゆえなり
索隱曰言人誰知夫志士推誠守死
要立名節仍是養生安身之本故云
人苟生之為見若者必死是解上
意言人苟以貪生之為見不能見危致命
若者必死若猶如也
孰く知之夫ハ費用を輕し

此財をやしひ之孰
志之夫乃恭敬辭讓乃安
之養婦ゆ之孰知ら之夫の
禮義文理乃情をやしひ
ゆ之

ハハクすを一生乃間より廣
とす人乃亦多手をとす尋
常十一年二十五年たすを
子孫を自由し奴僕を自在にし
饑寒よあをを苦しゆ
たのれ一人乃あをを
決定して理ありと寧
たすあり地念佛 地録
刻とは物やをて信
應しゆをえて信施を惜
ゆは智妻ハを此
冊帳より万日ゆを
皆同じゆを
ををらてゆ

始とらるやを晨より暮まで
また勞倦を乞く仰る見ざる
是をうばふと思ひて本為も
あまのぬがれおとらるを
考く仰る小芝居の公に
なり己うそをきく
を以てあり佛菩薩の
宗も遠ひ衆生れあらる
粗語とくひらひ仰るを
信うらハたらく有り
なり

人ハ正真なりひとのありは
となすところ物事を成し仰る
信心を失却し仰る物事を

堅固し一生を此念慮を
仰る是を大善知の相慮
渡せしむ世と安楽國観念
丈夫なり有り
着衣喫飯一生を行住坐卧
一生を人乃善悪我の善
悪鏡と仰みえれと有り
一目して是を詳し有り
事なるハ物の後を時に拂拭
人乃有りハ人のまませせと
之のしををを常觀し
之をえれとを能く辨し
くまらぬと人ハ人の水のなり

やうをばし打ちすて物ぬぬ
りうの人を若くもまうて
あつをよしとするなりゆい
らうをうて是を慕物と
厚く自然と考中信義なる
理群一にしてぬ山行なり
泥河を指てなきき四の
あふりうを不宮く自然
とせぬなり何となく天意
者なるよとなく人利
厚くたしどもまぬ
とくく人八人を徳く
らうをあしきを軽重大差
なり賢愚く専純も善要
まの明ととつらるる一人
成就とする

七十二
禹穴 隔州終不探 圖書性命
僅克函 東西南北山川好
天地人文 七十三

人乃生知とよハ得とさう
聖人よりきるとなれとも大
廟に入り事と問ひ終ハ禮を
示したまう 祓おふと記
まの同物とを好物と
佛者なりハ自棄此外
としおましてまの
思のあたり 下問といす

下等といふ一人成就を
期し物故乃事なり
一日乃同朝より暮よ
まで人の相應乃行事
飲
食より起坐より應對
書より教よも一に他法定
有ることなれハ臨時乃大小
巨細侍よりありて
すまはしなりたることあり
乃仕方よあねを是を
見らる長老の問よ、世間を
もるといふ人又ハよらる

ひらり隠者ぬなるとい
人も禮服なを著り
五節なを多身門に
まをよをいひいぬ
まをよをいして師と
おあとならふ所ハ老
乃よりあてあへ上下号
卑なると目ならゆ格
なとハ農工商同輩同類
乃開くなしといふ可也
あられもその中よ
つれあをうたな
よあらしひよ

おちてあつては又一體ハ愚
民と云ふ部類を超出を
得ざるもあつて人ノ家法
家事ノ多クハ身いやくし
たて相應く規約を定め
乃理あり況や讀書寫字
万書を業としして考へ
同し物なり礼を成し
物ノ多くなるとハ一向ノ不法
不埒ハ形骸として受けハ
よしよめハよしと云ふ安
堵し物なり人ノ本業とは
たましき事なり息心

なるとハ憂と云ふ病窮乃
ちと云ふ七十と云ふ齡を
経こし物、之のなれども
口をさへ人よりせしむ
物多しハ事ハ常人と
口すれ物多しと云ふ
物多しと云ふなりと云ふ
輩たかくはあつて
思ふことなししていよく
はしと云ふしまされハ
なめぬことと云ふ思ふ
なりける理を成し
あつて隨身り大小

己山より三甲人たして
人形を失し仰ねた
おろろけあふるを
さしけり仰なり

當年正月梅雪ありし三十日
雨二三日あり小雨ありなり
二月より今日四月まで
まてり 左に小雨ありて
農人日と夜と水とけり
寸隙も仰なり 旱魃と
いへりされ丸瓜茄子乃類に
成長を仰仰なり 傍り自然
晴曬し仰なり 江州乃植

出しなすくハ八九十萬石の餘
と得、宇治乃里より津の國
大河筋乃左に物けりなり
乃おハ谷と利益を仰仰
なり 物けり乃たなりハ
乃きししてひきりて夏
乃のもきとすくなりし
國中 庫下より井一あり
外小池ありて 雨水を
たぬれくまてり 月心
是く大くくし 仰なり
南圃乃空地より 井を新
けりなり 又おりて 仰
乃裏より 古井二あり

是をよきとせしむるはすまじ
と云ふを改め回りの有
大夫より修補して修め人
乃ちあらよく居候修め人
た立乃修果久を評議
賢主人ありなれは費
を省きて其事よく
補ひ給へ第一は此
為にも俗の二三次を
なす修りよりあらん勝
十約の八つてき約あり
あるは利便して損二
乃而は利うち約は工夫
せしむるはすまじ

人一代乃賢愚 愚は
なすを考へ思ふは
智仁勇乃三徳 人の具是し約

や否又ハひし約あり有
之をたし具し約あり又ハ
此よりし約ありと應押ひ約
尋常あり而ねいんきし
太平守事あり此の中

富者の富なり貧者の貧なり
貴者の貴にして賤者は
賤といよく決定し約あり
是を誰となつてをたし
事なきは安堵す約あり
道理なりハつて天ハ高
たなり此よりなり信は

字之工流... 正心誠意詩文

吾と豊ハ見人こそ教ハなり

たてしき人乃目工を定ナリ

むさあなひハよらもやきし

人をたしめひまありさハ

ぬしあふたふぬやうふてよ

百行ハ男又くさるふと志れ

女ハ貞乃一字まのりる

いそねいそハさうなくぬつし

思ひついなまの婆あり

天たつし人を一と見たり

果乃高下ハ人そ定む

瓜乃つりなすひハすぬ

果を定てよくとつとめよ

黄震通判廣徳廣徳俗有自嬰桎梏自拷掠
而以徼福者震見一人召問之乃兵卒也即令自
狀其罪卒曰本無罪震曰爾罪實多但不敢
對人言故告神求免耳杖之俗遂絶撫州饑
震奉命往救荒但期會富民耆老以某日
至至則大書閉糶者籍強糶者斬八
字揭於市米價遂漸平活人無算

今ハ六月四日夕子豊来り

小栗宗舟ハ寒山拾得を抄る

一見してぞ心とまらぬ

ゆりゆりニふくを金也

やまをよみたり何人乃

為着しゆりたり大とハ

杜少陵乃詩人人生七十古來稀
なりと云ふも日本人もよき
是を以て七十乃人を祝
むるも古稀をといふハ七
十乃事一宜め約ることなり
息心ハ七十三なり 三 此 年 あり
石橋庵の云ふもやまて癡と
なり約なりといふハ三四百
乃亦ありして往還し約
そ乃すこと甚く見くるし
これまたハ志ありしてつら
あ乃もを林くし 竹 依
然くしてつら約なれハ
一三四なりし

即ちあつたりなり あ あ あ あ
是く約こころ 寫 字 法
考乃事 壯 年 乃 時 なり
ちこころ 志 あり 九 一 體
乃諸乃事 七 十 二 年 を 行 約
事なれハ 損 失 なり
こと 同 ひ や う し
乃 遠 小
 混 雜 え
 笑 を
 不 思 識
 眼 力 壯 年 回 し
 齒 ハ 上 よ ろ 下 ハ 三
 枝 リ リ リ 是 不 食
 食

物なりそ乃向ひをらしし乃
齟齬と云ひらふ亦ハあり
らら此ことあるをたふたふ
すし 是をいふ物人
なりハ老を老とす物
をあるに敬ふては
いふもすなるを一時
ふきをたふらありて益を
いふ物に教ふて
そのありて 合體ハ自刻
乃為めありして真加なり
すなり 是を老人乃に
くせれけりあるなるあり
しつらん

禮義ハ六しらふのなり 情性ハ
自かく乃生得不持乃のなり
孛幼ハ乃禮義乃情性
和合して暫時も離れ物
そ乃有りと無りとハ是を人
是を謂ふ 正心誠意ハ
そ乃見ると正しく其擇ひ
まこと正し 是乃是非を
たなりと明白なれも それ
まこと一定を為すなり
古人乃の乃の堪能とす
見損し物なり 是乃聖
賢もまことあり 是乃
あやまりと乃言説あり

其事人車大なるは字
ありてししてこれ字道
を直るなり是をちりゆ
り志りし志るぬハ教く
ありしなりとこれワら也
ハ是ハ不可思議なり
一師傍を流されハかぬ
事なりとすなりハ大
なるハ家こ志るなり是を
付道とすなりとすなり
かしこなり今を乃道なり
乃を乃なりて輕重厚
薄されハ又これ時宜なり

其事其時其道理これハ
いへばハいへば彼ハかく是ハ
かくせよとすまことなり
臨機應変なりこれなり
自りて是をし他なり
なしゆかなれとも今御
乃道理をありとあり
備身務家と正心誠意
乃直るなりありて親師ハ
ワらも号軍所差別ハ一
様も混雜しゆぬ様なり
礼義の一途を志れり
いふ事君ハ君たりとす

臣ハ臣乃を思ひ人し
父ハ父たらんといえ子ハ
子乃を思ひ人し物思
孝全徳をすこしし
されりてろあれハ不
敬をあらハし物なり
不届者といふなりハ
罪科の答をそなりて
思ひ届し人なれ
情を思ひあなり

○
心なまふたつもたま。身
そしめられたまふ。

○
たごぼろをたつた
あつたハ

○
ひんがをたつし
あつたハ

○
よらんをたつた
あつたハ

○
人乃いのらたを天乃をたつた
あつたハ

○
善事をいそくゆふ
あつたハ

てろなりまこころなり人これ
ころころしゆもころを

くはしくも人ろくはさききん
うねを志すて是をほしむ

人の好むをいひくすま
る人あれはる人なり

いとけなきをさう教へを大
見やう見まゆとよををしれ

そろ子をいれはるなりとこれ
そろゆめを人いしくもしゆ

子せなりまといひまも子を
なれてハすまぬふもさとれよ

人ろ中て人ろおしる此の人
これ人ふと見しゆ人なり

あふふふを和といふなり
そろありやたしそれをまむなり

人ろをしるなりとつむ



